

---

# 僕とみんなと如月グランドパーク

唐笠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕とみんなと如月グランドパーク

### 【Nコード】

N6426T

### 【作者名】

唐笠

### 【あらすじ】

あることがきっかけで再度如月グランドパークに行くことになった一行は果たして？

コメディ要素はほとんどないので、原作のような軽い感じが好みの方は御一考ください。

**(前書き)**

こちらはバカテスの二次創作です。

明久×瑞希が許せるという方、勝手に過去を捏造がダメな方には向かないかもです。

始まりは土曜の朝に届いた一通のメールだった。

『明久、明日如月グランドパークに連れてってやるから今から俺の  
家に来い』

by 雄二』

ただで遊園地に行けるなんて願ってもないことだ。

ただ、字面だけだとまた誤解されかねないよね……

ピンポーン

チャイムを押すとほどなくして玄関が開く。

「あつ、霧島さんおはよう」

今更土曜の朝っぱらに雄二の家から霧島さんが出てきてもなんら不思議ではない。むしろ普通だ。

「……………おはよう吉井。入って」

「おじやましまーす」

僕が家に入るとそこには手枷と足枷を付けられている雄二がいた。しかも玄関なのにこの惨状だ……………

うん、いつもの光景だね。

「翔子早くこれを外せ！」

猿ぐつわはされていないので普通に喋れるみたいだ。

「……………雄二が如月グランドパークにいつてくれたら外す」

「なんで行かなきゃいけないんだよ！」

手枷と足枷を付けた雄二が暴れながら言う姿は哀れだね……………

「チケットがあったら行つてくれるつて雄二が言った。そしてここに如月グランドパークのチケットがある」

霧島さんは雄二が手枷をされながらも死守してるチケットを指さす。どうやら新しいチケットを手に入れたみたいだ。

「それはもう行つただろ!？」

「でも新しいチケットが手にはいったし、雄二は一回きりなんて言  
つてない」

確かに正論（？）だが、このままでは僕が蚊帳の外なので止めには  
いる。

「霧島さんちよつといいかな？」

「……………うん」

霧島さんが一旦下がる。

「明久早くこの忌々しいチケットを持って家に帰ってくれ！」

雄二は今にも死にそうな顔で僕にチケットを手渡す。

僕はチケットを見て雄二に笑顔を返す。

「任せてよ雄二」

「吉井、行かせない」

霧島さんが僕の方を睨んでいる。

このまま帰ったら間違いなく明日の朝日は拝めないだろう。

でも僕には秘策があるのさ。

「大丈夫だよ霧島さん。このチケット、8名まで対応だから」

「……………ならいい」

自分と雄二も行けることに納得したらしく再度霧島さんは下がる。

「明久、てめえ裏切ったな!？」

「裏切ったなんて人聞きが悪いなあ。雄二は明日如月グランドパークに連れてつてくれるって理由で僕を呼び出したんじゃないか。ちよつど8人まで対応してるみたいだから、みんな呼んでおくよ」

僕は雄二の返答を聞かず家へ帰っていく。

後ろから雄二の叫び声が聞こえたけど気のせいじゃないはずだ。

まっ、雄二だからいいよね

翌日、将来の霧島宅の前に僕たち8人は集まった。

メンバーは雄二、霧島さん、姫路さん、美波、秀吉、ムッツリーニ、工藤さん、それに僕の美少女5人、ムッツリー1人、バカ2人だ。

こつというのは男女比を合わせるべきだけでしょうかがないよね。

「明久よ、お主失礼な事を考えておつたな」

怪訝そうな顔で僕をみている秀吉にあわてて両手を振る。

「そんなことないよ。ただ男女比を合わせるべきだったなあって思っただけだよ」

「やはりお主はワシを男と見ておらんじゃろ!？」

だって秀吉は秀吉だしねえ……

ブルブル

そんな事を考えている僕たちの前に僕とは一生縁の無さそうな高級リムジンがやってきた。

「……………迎え。これにみんなで乗ってく」

霧島さんが呟く。

やっぱり霧島さんはお金持ちなんだなあ……………

「……………雄二は私の横」

「こら翔子離せ! 誰か助けてくれ!」

助けを求める雄二は霧島さんに連れられてリムジンの中に姿を消した。

本当に二人はいつでもラブラブだよな。

雄二もいい加減正直になればいいのに。

さて、僕は誰と乗ろうかな?



できれば姫路さんの隣がいいんだけど、姫路さんは僕なんか隣じゃ楽しくないだろうな……

「あろう、明久君」

「なつ、なにかな姫路さん？」

突然考えてた人に話しかけられるとすごいビックリするよね。

「よかつたら隣に座ってもいいですか？」

えっ……？

姫路さんが僕の隣に座りたい？

いやいや、そんなことは天地がひっくり返ってもありえないだろう？

これは僕の中の悪魔が僕に聞かせてる幻聴だ。

そうやって僕を貶めようたってそいはいかないぞ。

『ほら姫路が困ってるぞ早く返答してやれよ』

黙れ悪魔、その手には乗らないからな。

『まったく、自分が姫路さんの横に座りたいなら快くうけたらどうなの？』

天使まで出てきた。

しかも根本的には同じこと言ってるし……

あつ、ちなみに上のは『こんぼんてき』であつて『ねもとてき』じゃないからね。

根本といえは、あのクズの女装姿………

うっ、思い出したら吐き気が……

思わず口を手で押さえる。

「明久君大丈夫ですか!？」

そう言っつて、背中をさすってくれる姫路さんの優しさが胸に染みる

……

「ごめん姫路さん。先に車に乗せてもらっつね」

そう言っつて、僕はリムジンの助席に入っつていく。

『せっかくのチャンスを潰すとはこのバカめ……』

どうやら僕の中の悪魔はこのネタを引っ張り続けるらしい。

少し考えれば姫路さんが僕の隣に座りたがる訳ないんだから、引っ張る意味合いなんてないのに往生際が悪いなあ

ちなみに座席は

僕 運転手

姫路さん 美波

雄二 霧島さん

ムッツリーニ 工藤さん 秀吉

( PC用 携帯用 )

僕 運転手

姫路さん 美波

雄二 霧島さん

ムツツリーニ工藤さん秀吉

となっている。

それにしても横に三人乗りしても余裕があるなんて高級車はやっぱりすごいなあ……

高級リムジンから見える景色は格別だろうけど、生憎僕の頭にはあのクズの女装姿がちらついているため、そんな余裕はなかった。

あのクズは姫路さんを困らしたまでか僕にまで嫌がらせをするつもりか!?

「美波ちゃんもそう思いませんか？」

「うんうん、ウチもそれ思った」

「翔子、なに書いてるんだ？」

「……………秘密」

「ムツツリーニ君、ほらっ」

「くっ、卑怯な……………（ぶしやああー）」

「ムツツリーニよ、大丈夫か!？」

みんな楽しそうだなによりだ。

と、しばらくして車が止まる。

「お嬢様、パーキングエリアで休憩をとりましょう」

「……………わかった。ありがとう」

どうやらパーキングエリアに着いたみたいだけど、僕はあまり動く気になれない。

というか今、動いたら色々とヤバそうな気がする……………

「悪いけど、みんなで休んできて。僕は車の中にいるから」

「という訳だから明久以外全員降りるぞ。」

姫路に島田が出なきゃ俺たちも出れないんだから早くしろ」

なぜだか姫路さんと美波はあまり気乗りしないらしく、渋々と降りていった。

二人とも車酔いでもしたのかな？

「ではわたくしも小休憩とさせていただきます」

執事の方も降りて行って車の中には僕一人となった。

みんなが帰ってくるまで少し寝てよつと。

姫路さんSIDE

今、私たち7人はパーキングエリアのコンビニコーナーにいます。  
なぜだか明久君、出発前から体調が良くないみたいですけど大丈夫  
でしょうか？

手にとった酔い止めの薬を眺めながら考えていると、後ろから翔子  
ちゃんに声をかけられました。

「瑞希、吉井の事が心配？」

「そつ、そんなことありませんよ」

いくら翔子ちゃんが相手でも面と向かって言うのは抵抗があります  
ね。

「じゃあ、その薬何に使うの？」

「あつう、それはですね……」

動かぬ証拠を押さえらちゃいました……

「瑞希、もしかしたら私、車に財布忘れてきたかもしれないからそ  
の会計済ましたら見てきて」

そう言って翔子ちゃんは笑顔で私に車の合鍵を渡してくれました。

翔子ちゃんに気を使わせちゃったみたいです。

今度、翔子ちゃんと坂本君の仲も取り持ってあげないですね。

「翔子ちゃん、ありがとございますね」

私は急いでレジに向かいました。

明久 SIDE

「 きくん ひさくん 明久君」

誰かが僕を呼んでる。

というかこの呼び方をするのは姫路さんだけだけどね。

僕は手の甲で目をこすって起き上がる。

案の定、そこにいるのは姫路さんだった。

ただ車の鍵は執事の方が持っているのに、なぜだか運転席に座っているのだ。

「あの姫路さん、どうやって車内に入ったの？」

方法はどうかあれ僕の事を心配してくれたとか？

「ふえ、えっとですね……私は翔子ちゃんにお財布を探してくるよ  
うに言われて、それで合鍵をもらって……」

な訳ないよね。

一瞬でも自分に都合のいいように考えた自分が哀れになる。

「霧島さんの財布があるなら前から三番目の席じゃないかな？」

「ですよ。ちょっととってきますね」

そう言って姫路さんは助席と運転席の間にある隙間から後ろに向かっていった。

うう……………

まだ気持ち悪い。恐るべき根本パワー……………

姫路さんSIDE

私は今、翔子ちゃんのいた席で翔子ちゃんのお財布を探しています。

翔子ちゃんが気を使ってくれたとはいいい、本当にお財布を忘れてるかもしれないから探さないですね。

「姫路さん見つかった？」

助席から明久君が私を気遣ってくれます。

明久君は小さい頃からこういった小さな優しさが魅力的です。

その優しさを自分だけに向けてほしい。そう思うのは我が儘ですよ  
ね。

でも明久君が誰にでも優しくしていると私は嫉妬しちゃうんです。頭  
の中ではいけないことだと解っているのにそれでも嫉妬しちゃうま  
す。

そんな私が優しい明久君の横に並ぶなんておこがましい事なんです。

明久君にはもつと相応しい人がいるはずですから……………

ポト……………ポト……………ポト……………

泣いてもどうしようもないのに涙が出てきちゃいます。

いえ、もしかしたら私は泣けば明久君が気に掛けてくれると心のどこかで思ってるのかもしれない。

小さい頃、助けてくれたように。

でもダメなんです。

私はもう子供じゃありませんし、明久君には迷惑掛けたくありませんから。

涙をグツと堪えると、翔子ちゃんの財布探しを再開します。

「姫路さん手伝おうか？」

「大丈夫ですよ。すぐに見つかるはずで、ありました！」

翔子ちゃんは本当に財布を忘れていたようです。

でも翔子ちゃんが気を使ってくれたことには変わりはありません。翔子ちゃんに後でお礼を言わないとですね。

なんでしょう？



翔子ちゃんの財布から小さな紙がはみ出していました。

私は悪いと思いつつもそれを手にとります。

『瑞希、がんばって』

それは間違いなく翔子ちゃんの綺麗な字でした。

たった一言、私へのエール。でもそのたった一言が私に勇気を与えてくれたのがわかります。

ありがとうございます翔子ちゃん。

私はその紙を右手に握って、明久君のいる助席へと向かいます。

「姫路さん、霧島さんの財布見つかってよかったね」

明久君が笑顔で言ってくれます。

「明久君！」

「なつ、なにかな……？」

私は深呼吸して、あの紙を握りしめます。

「私は……」

たった一言の言いたい事が喉をつまんで出てきません。

「私、姫路瑞希は……………」

ただ、私が明久君の事を好きだという事実が口から出てきません。

「明久君の事が……………」

「ピピ」

「!?!」

車のロックを遠隔操作で外す音です。

ということはみんなが帰ってきちゃいます……

伝えたいことはありません。

でも、翔子ちゃんには悪いですけどそれは今じゃなくてもいいはず  
です。

ですから、当初の目的をはたしましょう。

「明久君、早く体調良くなってくださいね」

私は明久君に酔い止めの薬とお茶を渡して車を出ていきます。

翔子ちゃんに謝らなきゃいけませんしね。それにお礼もですね。

明久SIDE

なんだっただらう……………?

姫路さんから貰った酔い止めの薬を眺めながら考える。

霧島さんの財布を取りに来た姫路さん。

後ろで財布を探してる最中なぜだか泣いていた……

多分、姫路さんは隠しているつもりだったんだろうけど僕は分かっていた。

だって、姫路さんの事をいつも目で追いかけてきたから。本当に長い間、ずっと……

少しでも長く目に留めておきたくて、追いかけた。こんな僕なんかじゃ、叶わない恋だってわかってる。だけど踏ん切りがつかない。

いや、つけたくないんだ。

諦めが悪いって思われるかもしれない。それでもいい。

たったそれだけで姫路さんの側にいれるのなら、世間からの目なんて構わない。

だけどそれは姫路さんに迷惑を掛けてしまいかもしれない。いつか現れる、姫路さんに相応しい人との間を邪魔しちゃうかもしれない。

じゃあ、僕は諦められるのか？できるわけがない。

一度蜜の味を知った蝶は吸い尽くすまで飛び立てないのだから。姫路さんのくれる優しさという名の蜜を吸ってしまった僕は飛び立  
てない。

どんな良薬でも量を違え<sup>た</sup>ばそれは毒となる。

そして毒はやがて身体中に回り、僕を犯していく。

多分、永久に抜けることのない甘い毒。

それを僕は自ら進んで求める。いや、依存しているのかもしれない。

狂ってる……

僕は自嘲気味に笑う。

いつそのこと、その毒の中で死ねたらどんなに幸せだろう？

淡い幻想を抱いたまま最期を迎えられたら……

しかし、その幻想がさっきまで目の前にあっただ。

文字通り、手を伸ばせば届く範囲に。

伸ばした僕の手が虚空を掴む。

幻想は所詮、幻想でしかない。

さっきのあの幻想も僕の身勝手な解釈だ。

女の子が自分の事をの後を紡げないから告白じゃないかって？

バカらしい。

ありえないと、釣り合わない、自分で認めただけじゃないか。

なのにそんな幻想にしがみつくなんて最低だ……

いや、最低ならいつそのことあの場で手籠めにしてしまい既成事実をつくってしまえば……

これこそ本当にバカらしくて最低だ。

そんなことしてどうなるというんだ。姫路さんにとって辛いだけじゃないか。

そして間違いなく僕は拒絶されるだろう。

そうなれば僕は……

まったく、こんな事を考えたところで意味なんかないじゃないか。

どうせ僕にとって姫路さんは高嶺の花なんだからさ……

酔い止め薬の箱を開け、その中の錠剤をお茶と共に飲む。

薬の副作用かまたまた頭を使いすぎたのか分からないが、激しい睡眠に襲われ目を閉じる。

せめて夢の中で君と……

「おい明久着いたぞ！」

「ん〜」

雄二の呼び声で目を覚ます。

「明久君、体調はどうですか？」

「薬のおかげでバッチリだよ。ありがとう姫路さん」

僕は未だに覚醒しない頭をたたき起こす。

体調は予想以上に回復しており、あのグズの断片も頭に浮かんでこない。

つと、これ以上考えたら二の舞になりかねないよね。

車から降りるとそこは見知った如月グランドパークだった。

「なんだか客として来ると違った感じを受けるね」

「そうですね。あの時は色々とありましたから」

「そうね。あの時はアトラクションで遊んでる余裕なんてなかったし」

「わしらは大奮起じゃったからのっ」

「……………同感」

「俺はそれで大迷惑だったんだがな……………」

「あの時の雄二かつこよかった」

「あれね、みんなもしかして常連さん？いいなあ」

みんな思い思いの事を言っている。

そういえば工藤さんはあの作戦に参加してないから初めてなんだよね。

「そういや、8人で歩き回るのは少し効率が悪くないか？

そこで提案なんだが、4人2組にわけようと思う」

そう言っつてこいつ、霧島さんから逃げるつもりだな？

そんなの霧島さんが許すはずが「わかった。雄二が言っつならそうする」

ええ！？

「霧島さん、下手すれば雄二と別グループになっちゃうのによいの？」

「……………うん。これくらいで雄二と私が離れ離れになるようだったら、所詮私たちの仲はその程度」

なんだろう、言ってることはかつこいい(?)けど論点がずれてる気がする。

「ではこの前、遊んだ時に入れっぱなしじゃった王様ゲーム用の割りばしでグループを決めるかのう」

「じゃあ、1から4と5から王様のグループに別れようよ」

秀吉の提案に工藤さんがルールを付け加える。

なんで姫路さんと美波は秀吉の持ってきた王様ゲームの割りばしを真剣に見つめてるんだろう？

確かにグループは結構重要だけど、みんな見知った仲間だしそんなに気張らなくてもいいのに

「では、各々一本ずつ引くのじゃ」

秀吉の手から一本ずつ引かれる割りばし。

僕の番号は……………って王様!?

なんかここで運を使った気がするよ……

「私は2番でムツツリー二君が4番だよ!」

「……………工藤愛子、勝手に言っな」

「……………雄二、一緒」



「くそ！なんで1番なんか引いちゃったんだあー」

ということは……………

「よろしくね、姫路さん美波、秀吉」

「よろしくお願いしますね明久君」

「よろしくねアキ」

「うむ、よろしく頼むぞ明久よ」

僕は美少女3人とハーレム！

いつものむさいやつらは一切なしの僕だけのハーレム！！

「明久よ、顔が法律ギリギリ（アウト）になっておるぞ」

「はっ！？」

パンパン！！

顔を叩いて意識を覚醒させる。

あわゆく幸せで冥土送りになるところだった……………

「さっ、みんな行こうか」

雄二達のグループはもう遠くに行っちゃってるし、僕たちも早くしなくちゃね。

姫路さんSIDE

今、私たちは如月グランドパークのジェットコースターの列に並んでいます。

くじ引きでグループ決めをすると聞いて緊張していましたが、なんとか明久君と同じグループになりました。

「次の方どうぞ」

あっ、私たちの番がきましたね。

「瑞希…」

横から美波ちゃんが話しかけてきます。

「わかってますよ」

どっちが明久君の隣の席に乗るか勝負です！

「最初はグー、ジャンケンポイ！」

開かれる私の手、握られる美波ちゃんの手。

すなわちそれは私がパーで美波ちゃんがグー。

「しょうがないわ勝負だもの。今回は譲るわよ」

しよげている美波ちゃんにはかわいそうですが、これも勝負ですからね。

私は勝利を噛み締めて明久君の所へ「2人とも早くしないと出発しちゃうよー！」

「「えっ?」「」

見るとジェットコースターは出発する寸前で、明久君の横には木下君が座っています。

「「待つてください(てよ)」「」

私たちは大慌てでジェットコースターに乗り込みます。

当然ですが私の横は明久君ではなく美波ちゃんです。

別に美波ちゃんが嫌というわけではなく、むしろ友達なのですから嬉しいんですが複雑な気分です……………

雄二SIDE

今、俺は翔子、ムッツリーニ、工藤のメンバーでバイキングに乗っている。

乗っているのだが……

「翔子、いい加減目隠しを外せ！」

そう、俺は今日隠しをされている。

「……………だめ。雄二がバイクの風圧でめくれた他の女の子のスカートをのぞくかもしれないから」

「ムツツリー二じゃあるまいし、んなこんするか！というかできるかー！」

「……………失敬な」

いや、お前は隙あらばするだろ……

「そんな事言つてムツツリー二君カメラ構えてるね」

こいついつか捕まるな。

「……………これは護身用」

なんの護身だー！！

「……………雄二キョロキョロしない」（ブスッ）

「目隠してるんだから目潰しする必要ないだろうがー！！」

俺の恐怖の遊園地はまだ始まったばかりだ。

美波SIDE

今ウチたちはグラウンドパーク内の飲食施設にいるの。

ここはいわばバイキング制度を実施してるんだけど、アキと木下がウチと瑞希の分もとってきてくれるって言ったから、今席にいるのはウチと瑞希だけ。

「瑞希、前から聞こうと思ってたんだけど、そのウサギの髪飾りってアキからの贈り物？」

「ふえ！？ちつ、違いますよ」

よかった。

あれがアキからの贈り物だったら、ウチはある意味二人のラブラブっぷりを見せつけられてることになるから。でも瑞希の慌てようが気になるわね。

「瑞希、なんでそんなに慌てるの？」

「ぜつ、全然慌ててなんかいませんよ」

怪しいわね

「でもアキと関係あるんでしょ？」

「ないと言ったら嘘になりますけど……」

瑞希がうつむいてしまう。

ウチは別に美春みたいな趣味はないけど、こつこつ時の瑞希は純粹にかわいいと思う。

なんとというか加護欲ついでにかしらをかられるのよねえ。

きつとアキも瑞希みたいなのううのが好きなのよね……  
ウチみたいなのがさつな女なんか……

「いったいこれはどうしたのじゃ!？」

突然の声に顔をあげるとそこには木下がいた。

「島田に姫路よ、二人してうつむいてどうしたのじゃ？」

「「なんでもないわよ(ですよ)」」

まさか二人してアキの話題でうつむいてたなんて言えないわよね。

「そうかならいいのじゃが」

そう言っつて木下も席につく。

「島田はサンドイッチ、姫路はパスタでよかったかのう?」

「うん。木下ありがとね」

「ありがとございますね、木下君」

ウチは木下からサンドイッチを受けとる。

サンドイッチはそれぞれ色とりどりでも美味しそうだった。

「みんなごめん待たせちゃったね」

アキもドリンクを持ってやってきた。

「姫路さんは紅茶でいいよね」

「ありがとうございますね、明久君」

ウチはくちびるをかみしめる。

アキが瑞希に渡すときは質問じゃなかった。

答えがわかりきっている問이었다。

それはそれだけアキが瑞希の事を知っているということ……  
それだけアキは瑞希の事を見ているということ……

ウチは悔しいような悲しい気持ちになる。

「美波はお茶でいいかな？」

「うん、ありがとね……」

ウチの時はやっぱり質問だった。

瑞希とは違うアキの反応、それがウチにはひどく辛かった。

にがっ

ウチは好きでもないお茶を飲んでそう思う。

昼食をとり終えたわしらは今、コーヒーカップに列に並んでおる。なにやら島田と姫路が後ろで話し合っておるのう。

「ねえ、ひでよ」断る

わしは即答する。

「ひどいよ秀吉。僕はまだなにも言っていないじゃないか」

「お主の言いたいことぐらいわかっておる。

大方、わしとコーヒーカップに乗ると言い出すのであるらう？」

「なんでわかつたの!？」

やはりそうであつたか……

「何度も言つがわしは男じや。

それに加えてコーヒーカップなら姫路か島田と乗ればいいであらう？」

「だつて、アトラクション待ちの時の二人はなんだか怖いんだよ……」

…

こやつはどうしてこんなに鈍いのじや？

姫路と島田が悔やまれるのう。

「それはお主が全面的に悪いのじや。

それにほれ、姫路が後ろでもじもじしておるぞ」



わしは後ろにおる姫路をゆびさす。

「あ、あのう、明久君よかったら一緒コーヒーカップに乗りませんか？」

姫路は今来たばかりじゃからわしらの話しは聞かれておらぬじゃろう。

「う、うん行こうか」

二人して手を繋ごうとして引っ込めておる。  
なんというか二人とも本当に初じゃのう。

二人がゲートをくぐったのを確認してわしは後ろを向き、そこにうつむいておる島田に話しかける。

「島田よ、落ち込むでない」

「別にウチはアキとなんか乗りたい訳じゃないわよ……」  
なんというか島田も難儀じゃのう。

「まあ、そんなに意地をはるでない」

「いいのよ、ウチなんかどうせかわいくないし、がさつだし……」  
さすがにほっとくのはちと胸が痛むのじゃ。

「わしは島田も十分かわいいと思うぞ？」

「えっ？」

驚きのあまり島田が顔をあげる。

「だからわしは島田がかわいいと言っておるのじゃ。  
こんなにかわいい島田とコーヒーカップに乗れるわしは幸せ者じゃ  
な」

わしはちとばかり大げさに言う。

人を元氣付けるにはこの方が有効なのじゃ。

「ふふっ、ありがとう木下。」

お世辞だってわかつてるけど嬉しかったわ」

その時の島田の笑顔はお世辞抜きにかわいかったのじゃ。

ただ、その笑顔が本来はわしに向けられるものでないと思うと少々  
つらいのう。

「どうしたの木下、早く行きましょ？」

「うむ、行くかのう」

この時のわしらは予期することもなかった。  
この先、わしらに訪れる事などつゆほども。

姫路さんSIDE

コーヒーカップに乗り終えた私たちはお化け屋敷にやってきました。せつかく明久君と一緒にコーヒーカップに乗れたのに恥ずかしくて何も話せませんでした……  
明久君も目を合わせてくれませんし、やっぱり私じゃダメなんですよっか……

ちなみにここは坂本君と翔子ちゃん用のお化け屋敷とは別物です。

「瑞希、今度は負けないから」

「私だって負けませんよ」

ここのお化け屋敷は二人制度ですし、肝試しの時みたいに美波ちゃんに先を越されるわけにはいきません。

「最初はグー、ジャンケンポイ！」

私はチヨキで美波ちゃんはパーです。

「また負けた……」

「美波ちゃんごめんなさいね」

こつも勝ち続けるとさすがに罪悪感があります。

「いいのよ、ジャンケンなんだし仕方ないじゃない」

そう言っつて美波ちゃんは木下君の方へ行っちゃいました。

気のせいでしょうか、こころなしが美波ちゃんの顔が明るかった気がします。

私も明久君を誘ってお化け屋敷に……

「ひっ、姫路さんぼっ、僕たちも行こうか？」

「はっ、ひゃい」

うっ……

はいと言いたかったのにひゃいって言っちゃいました……

お化け屋敷の中は暗くて、じめじめしていて怖いです。

それに加えていっどこからオバケが出てくるかわからない恐怖、もしかしたら本物のオバケがいるかもしれない恐怖など、怖い要因がたくさんあります……

「姫路さん大丈夫？怖くない？」

「はっ、はい。全然平気でへっちらだっただんですよ」

明久君は私の言葉を聞いて笑います。

確かに混乱していて言葉がおかしかったですけどあんまりです……

でも私はとても嬉しいです。

明久君のその笑いは笑顔ですから。

知ってますか明久君？

私は明久君の笑顔が大好きなんですよ。

初めて会ったあの時からずっと……

知ってますか明久君？

私は何度もその笑顔を追いかけていたんですよ。

少しでも明久君に近づきたくて追いかけてたんですよ。

明久君の側にいたかったんですよ。

でも明久君は人気者ですから私が、私だけが明久君の笑顔を独り占めすることはできないんです。

それでも私は何度も明久君の笑顔に救われてきたんですよ？

小さな事から大きな事まで本当に多くの事を。

だから

「ありがとうございますね明久君」

「？」

訳が分からないって顔してますけど、それでいいんです。

明久君は優しいですから、私の気持ちを知ったら断れなくなっちゃう筈です。

私は明久君を縛りつけることなんてしたくありませんから、それでいいんです。

私の中の明久君への秘密ですから。

だからせめて明久君に相応しい人が現れるまでは、その笑顔を私にも向けてください。

大好きです明久君

私は明久君に笑いかけます。明久君も笑顔を返してください。

その笑顔を見る度に胸がやすまります。

ただ、明久君の後ろに……

「きゃあああー!!」

オバケがいるんです。

「うわあああー!!」

私は恐怖のあまり明久君の懐に逃げ込むように飛び付いてしまいました。

「ひっ、姫路さん／＼／」

顔をあげると私が明久君を押し倒すかたちに……

「ごっつ、ごめんなさい明久君すぐ退きますから／＼」

私は起き上がろうとするのですが、腰が引けて立ち上がれません。

「明久君すいません、あと少しで、ふえ!？」

明久君が起き上がろうとする私を押さえつけます。

それはすなわち私は明久君に抱きしめられて……

明久SIDE

僕はいつたいなにをやってるんだ。

腕の中に温もりを抱え僕は考える。

姫路さんが飛びついてきた時は確かにびっくりした。

ただ姫路さんが僕から離れようとしたとき、言いかねぬ焦燥感に襲われた。

いつか訪れるであろう別れが間近に迫っている気がして、僕の方へ引き寄せた。

君を失いたくなかった。

ただその一つの想いだけに僕の理性は崩された。

あれだけ理屈を並べ、諦めようとしたのにできなかった。

たった一つ出来事だけで儂く揺れて崩れる虚勢、嘘、そして優しさ。

君は僕を優しいと言うけど、本当はそうじゃない。

僕の優しさは僕に対する優しさでしかないんだ。

君に近づきたくて優しくした。

周りに気づかれるのが恥ずかしくて、周りにも優しくした。

気づくと君との距離は離れていた。

その時の僕の気持ちは誰にもわからないだろう。

いや、わからない方がいいんだ。

こんな歪んだ愛情も優しさもわからない方が幸せなんだ。

でも文月学園に入学することになって少し君に近づいた気がした。

召喚獣のお披露目の時に君に会えて嬉しかった。

誰にも怪しまれずに君だけを見れたから。

それ以上関われないと思っていた……

だけど振り分け試験の時、君は高熱をだした。

その時、僕は本心で喜んでいた。



テストを途中中断したら0点だ。

なら僕と同じFクラスなんだ。

また僕に君と近づけるチャンスが巡ってきたんだ。

それが嬉しかったんだ。

そんな最低なやつなんだ。

だから

「ごめん、姫路さん……」

僕は手を離す。

「いつ、いえ私の方こそごめんなさい」

君は僕の謝罪の意味をわからなくていい。

君に失望されたくないから。

いつまでも『友達の良い明久君』でいたいから。

だから君に相応しい人が現れるまではせめて君の側に……

翔子SIDE

今、私たちは夕方の部のパレードを見るために瑞希のグループと合流している。

このパレードは夕方と夜の部に別れているらしく、夜の部のパレードには特等席のプレミアムチケットがあるらしい。

なんとしても雄二といってみせる。

密かに意気込む私に瑞希が話しかけてくる。

「翔子ちゃん、ちょっとこっちに来てください」

手招きする瑞希についていきパレードの列から外れる。

幸い他の人はパレードに夢中でこちらには気づいていないようだ。ただ、瑞希がいつもどこかが違う気がする。

「……………どっしたの瑞希？」

瑞希は私の質問には答えず、ポーチから何かを取りだし私に手渡した。

「瑞希これって……………」

瑞希が私に手渡したのは夜の部のパレードのプレミアムチケットだった。

「この紙のお礼ですよ」

瑞希はポーチからもう一枚の紙を取り出す。

それは私が瑞希へのエールのために財布に挟んでおいた紙だった。

「これをどこで？」

「お化け屋敷でいい写真がとれたペアに副賞のカップラーメン一年分と一緒にくれるらしいんです」

お化け屋敷でいい写真といえばカップルの片方が相方に抱き着く写真だろう。

「でも瑞希は吉井と行かなくていいの？」

「……………いいんですよ。」

それは私からのお礼ですから翔子ちゃんがもらってください」

微妙な合間。

それは人がなにかを追蹤している証。

だけどそれは本人が解決しなければ意味がない。

だから私は一言だけ言う。

「瑞希、ありがとう」

私と瑞希がパレードの列に帰るとパレードももう終盤だった。

「翔子、どこ行ってたんだ？」

「……………秘密」

雄二が心配してくれたのは嬉しいけど、瑞希となにがあったかは秘密にする。

雄二が知ったら吉井を弄るから。

「パレードもそろそろ終わるし、夕食といくかのう？」

「そうだね、僕ももうお腹ペコペコだよ」

優子の弟の提案に愛子が賛同する。

「せっかくこれだけの人数がいるんだから、みんなで買い集めしようぜ」

「おっ、雄二それいいね」

「じゃあ、私と雄二は焼きそばを買ってくる」

私は雄二の腕を掴む。

「勝手に俺をお前と一緒に役割にするな！」

雄二は今日も照れ屋さん。

「じゃあ、僕とムッツリーニ君はポテトだね」

「……………好きにしろ」

愛子はいつも積極的。

少しは瑞希も見習うべき。

「姫路さん、僕たちはジュースでも買いに行こうか？」

「はっ、はい」

珍しく吉井が積極的。

なにか吉井にあったかな？

「木下、こちらはフランクフルトでも買いに行きましょう」

「うむ、そうするとするかのう」

瑞希とライバルの筈の島田も上機嫌みたい。

なんか変……………

正確に言えば私たちと違うグループだった人たちが変……………

「どうした翔子？行くぞ」

「……………うん」

雄二と一緒に買い物。

私と雄二のためのお買い物じゃないけど雄二と一緒に。

それが嬉しい。

でも雄二、あなたの目は本当は誰をうつしてんの？

私、それとも違う誰か？

不意に恐怖にさいなまれる。

けどそういつ時はいつも

「翔子、こっち見る」

「んむっ」

振り向いた私の頬に雄二の指がささる。

「ははっ、変な顔だな」

おどけてみせて私を励ましてくれる。

でも少し悔しいから

ブスッ

「ぐあああー、翔子目はやめろ！ー！」

これができる間は雄二と対等。

もしこれをやる時にためらいを感じたら、それだけ私と雄二の溝が深くなっただけのこと。

雄二を諦めるつもりなんて毛頭ないけど、雄二が私を見てくれなくなっただけはとうすればいいの？

ポンッ

雄二の手が頭の上に乗せられる。

私は思わず目を細める。

なんで雄二は私が本当に優しくしてほしい時がわかるの？

わからない。

だけどここの気持ちに嘘はないから今はこれだけを言おう。

「雄二大好き」

明久SIDE

カランコロン

「これで全部ですね」

「そうだね」

自動販売機からサイダーを取り出す。

「じゃあ、集合場所まで帰ろうか」

「そうですね」

僕が5本、姫路さんが3本のペットボトルを持って歩きだす。

さすがに女の子と同じ本数って訳にはいかないからね。

でもこれも君に気に入られたいがための無駄な努力。

君に対する優しさじゃないんだよ。

気づかれたくない思いと気づいてほしい思いが交差する。

そんな混沌とした想いで君に笑いかける。

その時気づいてしまった。

いつも君が身に付けているものがないと。

今まで緊張してて気づかなかったあるものがないと。

たしかコーヒークップの時にはあった筈だ。

「ごめん姫路さん、おつり取り忘れたから先に集合場所に行つてて」

「なら私も」大丈夫だから先に行つてて」

そう言つて姫路さんに僕の分のペットボトルも渡し、走り出す。



もし落としたならあの場所だ

美波SIDE

今、ウチと木下はフランクフルトを持って集合場所に向かっている。  
木下はウチを気遣ってかフランクフルトを5個持ってくれていた。

そういう優しさが素直に嬉しい。

いつもは女の子みたいな扱いを受けているけどやっぱり男なのよね。

そう意識すると顔が火照ってくる。

「島田よ、どうしたのじゃ？」

「ううん、なんでもないの」

恥ずかしくて木下の顔を直視できない。

目をそらしたウチの視界に集合場所で待っている瑞希がうつる。

アキと一緒にじゃないけど、どうしたんだろっ？

そう考えるウチの前に人だかりが通りすぎる。

しかし人だかりがなくなるとそこに瑞希の姿はなかった。

「瑞希!?!」

「どうしたのじゃ島田!?!」

「さっきまで集合場所にいた瑞希がいなくなったのよ!」

そう人だかりが通りすぎる一瞬で。

「お主の見間違いではないか?」

「だってペットボトル持ってたし。」

第一、あんな娘そうそういないでしょ」

ウチが木下に説明していると坂本と土屋のグループもやって来た。

「おい今、そこに姫路がいなかったか?」

「……………たしかにいた」

「ほら、坂本と土屋も見たって言ってるじゃない」

「しかしのう、人が途端に消えるとは考えにくいのじゃ」

なおも木下は食い下がる。

「あつ、吉井君だよ」

工藤さんの声にみんなが振り向く。

「はあはあ、みんなごめん、待ったよね。」

あれ姫路さんは?」

「アキ、あんたも瑞希のこと知らないの?」

「おかしいなあ、僕がおつり忘れたから先にここに来てもらってるはずなんだけど」

といことは瑞希がここにいたのはほぼ確定。

「明久、冷静になって聞け」

坂本がアキの肩に両手をのせる。

「なんだよ雄二あらたまっちゃって……」

アキは瑞希がさっきまでここにいたことは知らないけど、最悪のパターンでは

「姫路は誘拐されたかもしれない」

「えっ？」

なにいつてるんだよ雄二、つまらない冗談はよしてよ」

「あくまで可能性だが、冗談じゃない。

ムツツリーニ、今すぐ情報収集だ」

土屋はうなずくと、素早い動きで消えていった。

「雄二、芸が込みすぎだよ？」

「明久、認める！」

「雄二嘘だろ！？嘘だと言ってくれよ！

みんなもなんか言っつてよ、姫路さんは誘拐なんかされてないよね！

？」

アキが坂本の胸ぐらを掴みながらみんなを見渡す。

だけどみんな目をそらすことしかできない。

もちろんウチも……

「そんな……」

力なくうなだれるアキの手から何かが落ちる。

「アキ、これって瑞希の髪飾りじゃないの!？」

「うん、偶然拾ったんだよ……」

アキは髪飾りを拾うとみんなに背を向ける。

「みんな、悪いけど用事を思い出したよ」

そう言うとアキは走って行ってしまった。

私たちは止めようとするが既にタイミングを逸してしまっている。

多分、いや絶対にアキは瑞希を探しに行ったのね。

今のアキをウチには止めることはできない。いや、止める権利もないのかもしれないわ。

だからアキ、瑞希を助けてあげて

明久SIDE

僕が悪いんだ。

僕が姫路さんから目を離したから姫路さんは……

僕が姫路さんの髪飾りを探しに行くときに姫路さんも連れてけば、僕がかっこつけようなんて思わなければこんなことにはならなかつたんだ……

すべては僕の僕に対する優しさ、いいや身勝手さがうんだ事態なんだ。

それにしてもなんで何も目撃情報がないんだ!?

普通、誘拐騒ぎがあれば目立つはずなのに……

『ピンポンパポーン

ただいまより夜の部のパレードを開始します。

プレミアムチケットをお持ちの方は赤の城屋上にお越しく下さい』

そうか、プレミアムチケットがなければ入れない赤の城の屋上ならば人目につかない!

きっと頃合いを見計らって、ここから出るつもりなんだろう。

「待て明久」

走り出そうとする僕に後ろから声がかかる。

「どうしたのムツツリーニ。今、急いでるんだけど」

「これを持ってけ。霧島からの贈り物だ」

ムツツリーニから手渡されたものはプレミアムチケットだった。

確か姫路さんも持ってた筈だけど、霧島さんも手に入れてたのか。

「ありがとうムツツリーニ。」

霧島さんには後でお礼を言っとくよ」

ムツツリーニは親指を立て行ってこいとサインをだす。

僕は赤の城に向けて走り出した。

NOSIDE

しとしとと雨が降る。

その中で一人の少女が泣いていた。

そこに傘をさした一人の少年が駆け寄る。

「どうしたの瑞希ちゃん？」

「あつ明久君。あのね無くし物しちゃったの」

明久と呼ばれた少年は自らが瑞希と呼んだ少女に傘を渡す。

「じゃあ、僕が見つけたいてあげるから瑞希ちゃんは部屋に戻って」

「でもそれじゃ明久君が濡れちゃうよ」

「いいんだ僕は濡れるの好きだから。」

それに瑞希ちゃんが風邪ひいちゃ困るからね」

ニコリと微笑む少年を見て少女の顔が火照る。

「うん。ありがとね」

少女は少年に申し訳ないと思った。

だがそれ以上にこの少年に頼りたいと思った。

この少年に自分の探し物を見つけてほしいと思った。

だから少女は部屋へと戻っていった

姫路さんSIDE

明久君……

あれは明久君と私の初めての関わり合い。

あの時、私の無くし物がなにかと言わなかったのに、明久君はこのウサギの髪飾りを見つけて来てくれましたね。

ずぶ濡れの明久君は先生に怒られていましたけど、一度も私の事は口に出しませんでしたね。

あの時、なにも言えなかった。たずるい私を許してください。

あれから何度も助けくれたのに大した事もできない私を許してください。

ごめんなさい明久君……

明久SIDE

プルルル

赤の城の階段を上っている僕は電話に出る。

「もしもし、いまこっちはいそ「きるな明久！」

どうやら電話の相手は雄二のようだ。

「明久、あと5分でなにがあっても屋上につけ！」

それだけ言うと雄二は電話をきってしまった。

この建物の構造を考えると5分は少し難しいかもしれないけど、雄二にも考えがあるんだろう。



それになにより姫路さんの命運がかかっているんだから、一分一秒だってほしいんだ。

「うおおおー！ー！ー！」

バンツ！！

屋上の扉を勢いよく開ける。

そこには気を失っている姫路さんと犯人とおぼしき人物がいる。

雄二が提示した5分まで後30秒……

「おい、お前誰だ！？」

犯人が怒号をあげる。

「姫路さんを返せ！！！」

こんなやつにこたえる必要はない。

殴りかかろうとする僕の足が止まる。

犯人が姫路さんに刃物を突きつけているのだ。

「くっ……」

「どうした、近づいてみるよ!？」

近づけるわけがない。

近付いたら姫路さんは……

なにか打開策は……

一つだけある。

だけど不確定要素が絡みすぎてる。  
でもここでやらなきゃ後がないんだ。

腕時計で時間を確認する。

雄二が提示した時間まで残り5秒。

雄二、任せたからね

僕は走り出す。

「バカめ、こいつの命がほしくないのか!？」

犯人が刃物を振り上げる。

その瞬間、僕の後ろで花火が上がる。

それも特大のやつだ。

ここは高層ビル並みの高さがある建物の屋上だ。

すなわち僕の方を向いていれば花火の光を直視することになる。

当然、犯人は目が眩み、刃物を落とす。

「くらええー!!!」

僕の拳が犯人の鳩尾をとらえる。

打ち所が悪かったらしく犯人はそのまま倒れ込む。

「警察だ、観念しろ、って、あれ……?」

突然入り込んできた警察の人たちが頭の上に?マークを浮かべている。

「いったいこれは……?」

「僕がこの娘と来た時には、もうこの人が倒れてましたよ」

「は、はあ……」

警察たちは?マークを浮かべながらも犯人に手錠をかけ、去っていった。

さて僕も姫路さんを起こさないかね。

「姫路さん、姫路さん」

僕は姫路さんを揺さぶるが起きる気配がない。

しょうがないからおぶってくしかないよね。

色々と背中に当たって僕の理性がヤバイ気がするが、姫路さんをここに置いていくわけにはいかない。

僕が姫路さんに背を向けると背中に柔らかいものが!?

「姫路さん!?!」

「ふふっ、明久君おんぶです」

姫路さんがいたずらっぽく笑う。

「姫路さんいつから起きてたの?」

「秘密ですよ」

姫路さんが再度いたずらっぽく笑う。

ピュ~~~~~ドーン

火花がうち上がる

「きれいですね」

「そうだね」

君の方がきれいだ。

そんな月並みの言葉も言えない僕だけど、君のためならがんばれる。

なんでもと言わないけど、できる限りはやってみせる。

それだけは自信を持って言える。

ただ、面と向かって言うのは恥ずかしいけど。

「ほら明久君、あちらにも花火があがりましたよ」

姫路さんの指さす方向に緑とピンクの花火があがる。

「うん、きれいだね。

本当にきれいだよ」

僕は花火を見つめ、ただ思ったことを述べる。

そう、僕の本心を。

NOSIDE

花火を見上げる男女がいた。

二人は同じ想いを抱きながらも伝えられずにいた。

おぼさっている少女は少年に笑いかける。  
少年も笑い返す。

たったそれだけでよかった。

あなた  
君の側にいられるのならそれでいい

でもいつか君にあなたに相応しい人が現れたら祝福しよう

あなた  
君が笑えるように

願わくば、その人物が僕（私）であってほしい

ただそう願ひ、二人は身を寄せあった。

(後書き)

いかがでしょうか？

当初はこんなに長くなる予定もなく、連載中の『バカとゲームと召喚獣』の息抜きに書いていたのですが、ずるずると引っ張ってしま  
いこの始末に……

個人的には明久×瑞希が書けたので満足しています。

あつ、残りのグループも花火を楽しんでいますのでご安心を。  
ただ、そこを書くともども締まりが悪くなるので割愛させていただきますました。

では、よろしかったら評価や感想などお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6426t/>

---

僕とみんなと如月グランドパーク

2011年9月10日18時57分発行